

読書について

ヴァルター・キリー

松川 弘*・訳

1928年に、経験豊かな読者であり蔵書家であるヴァルター・ベンヤミンは、次の様に書いた。「[...]」そして、本など開こうものなら、たちまち、移ろいやすい、色とりどりの、喧嘩腰に喚きたてる活字の群れが、ぼくらの両眼の上に雨霰と降り注ぎ、本の持つ古代の静謐のなかに忍びこめるチャンスなど、微々たるものとなってしまったこの節なのである。今日、すでに大都會の住民の眼から、いわゆる精神の陽を覆い隠しているイナゴの群団のごとき文字の雲海⁽¹⁾は、年を追ってはいよいよ厚味を増してゆくことだろう。

ベンヤミンはこの暗い予測⁽¹⁾の実証をもはや身をもって知ることはなかった。彼の予測は歴史により凌駕されたのである。衝撃的なあらゆる徴候とならんで1920年代のベルリンの色とりどりのネオンサインや刺激的な文字もまた色あせてしまった。路上や家並みの上、ポスターや独・仏の大学の壁で文字は色あせている。世界から静謐を生み出したもうひとつのコミュニケーション手段についても同じことがいえる。

そんな時、——とくに子供たちには——以前なら心の中で発達したものが外から押しつけられることになる。今世紀の数多くの作家が、自分の少年時代を回顧しながら、子供の生の力強さを描いていることは注目に価する。もう一度ベンヤミンを引用しよう。「テキストのそのやさしくひそやかに、びっしりと絶え間なく、まるで雪片のように、ひとを包みこんでくる力に身を委ねて、一週間というものは、ただただ相手のなすがままだった。足を踏み入れつつ、無限の信頼感があった。歩を進めるにつれて、いよいよ魅惑的な本の静謐/内容など、さほど重要ではなかった。なにしろ、それはまだ、お話なら寝床のなかで自前のをいくらかでも紡ぎ出していた時分の読書だったのだ。そうした夢物語の、半ば吹き消された道の跡を、子供は追って行く。本を読むとき、かれは両の耳をふさぐ。本はあまりにも高すぎる机の上ののって、いつも片方の手が、ページの上に置かれている。かれは、主人公

の冒険がまだ活字の渦に埋もれているうちから、もう、雪片の乱舞するなかから何かの人物像や知らせが浮かびあがってくるみたいに、それを読みとっていく。生起する事柄と同じ空気を呼吸し、すべての人物の息がかれの顔に吹きかかる。おとなにはとても太刀打ちできないほど親密に、かれは登場人物たちのなかにまぎれこんでしまっている。出来事と、入れ替り立ち替り繰り出してくる言葉との、言い知れぬ襲撃を受けて、立ちあがったときには、読んだものが雪のように深く身に降り積っている」。

比喩的にいえば、子供が読書の静謐な空間、あるいは幼年期の暗い空間から脱け出して、もはや本の登場人物たちのなかではなく、おとなたちのなかにまぎれこむときに、こうした空想の雪片が溶けていくことは容易に想像できよう。われわれが——おそらく誤って——「現実」と呼んでいる世界には、想像力の渦巻を容れるだけの余地はない。そのような子供の読み方を思い起こさせる静謐もまた存在しえない。確かに、子供はおとなとは全く異なる読み方をする。おとなの読み方については後で触れるが、子供はおとなよりもずっと古風に、そして同時にずっと根源的に読むのである。

それは、読書が子供にとってはごく最近ものにしたばかりの技術だからだ。両の耳をふさいだり——マルセル・ブルーストのように——庭の木陰に隠れ家を求める（「読書をやめたくない私は、せめて庭に出てマロニエの木陰でそれをつづけようと、エスパルトむしろのマットとテント地のシートとがあるせまい小屋へ行き、その奥に腰をおろした、そうしていると、両親を訪ねてくる人があってもかくれて目につかないと思ったのである」）⁽³⁾子供の逃避的な態度は、書物の上に身をかかめ、外が夏であろうが冬であろうがそんなことはおかまいなしにひたすら自己の内部にとじこめる古風な読書家のイメージを彷彿とさせる。そんな訳で、最初の読書を回顧的に思い浮かべることが、往々にして

* 外国文学語学教室

「失われた時を求める」ことになるのである。失われたのは何も幼年期ばかりではない。読書する子供を包みこんでいた世界もまたおそらく失われたであろう。隔たりの欠如、読み取ったものを真実であると確信し自己の血肉に変えることが強さを生む。それは、子供の読者が「おとなにはとても太刀打ちできないほど親密に、登場人物たちのなかにまぎれこんでしまっている」⁽⁴⁾からなのだ。

おとなになって『スワン家のほうへ』を翻訳したとき、ベンヤミンはこうした経験を思い出したにちがいない。「[...] 新しくつくられたそうした人間たちの行動、感動が、われわれに真実と見えてくることになんのふしぎがあらう、なぜならわれわれはそんな行動、感動をわれわれのものにしたのだから、そしてそれらがわきおこるのはわれわれの心のなかであり、熱に浮かされたように本のページをくっているとき、われわれの呼吸のはやさ、凝視の強さが、その本に新しくつくられた人間たちに支配されているのも、われわれの心の内部においてなのだから」。そのようにして本は読者の心を完全にとらえ、それどころか彼を、「その小説がわれわれを夢にみちびき、その夢は限りながら見る夢よりも明瞭で、しかもその記憶がずっと長くつづいてわれわれの心をかき乱すといったそんな状態」⁽⁵⁾に置いた。

かつての読書経験を全生涯の解明の基礎にすえるこうした回想に、われわれは記憶の根強さを認める。ジャン＝ポール・サルトルは自伝の最初の巻を「読むこと」、「書くこと」と名付けられた二つの節に分けている。ここでも子供の読書、あまり無邪気なものではなく苦しみにみちた読書のことが話題にされている。「言語」を吸いこみ、心象に吸いこまれた私は、結局、これら二つの同時的危険のもつ非両立性によってのみ救われたのだ。日が落ちる頃、言葉のジャングルの中をさ迷い、どんな小さな物音にも飛びあがり、床のきしむ音を間投詞ととり違えた私は、未開のままの言語、人間に触れていない言語を発見したと信じていた。だがその時母が入ってきて、「まあ坊やったら、目がつぶれちゃうじゃないの！」という叫びで「現実」の権利を認める。誰にも、こうした母親による中断、現実への呼び戻しの思い出はあろう。しかし、幼年期の日常への帰還を次の様な文で飾るのは、このように言葉に憑かれ、早くから思索で悩んでいた読者に限られる。「こうして子どもの生活に復帰した後にも、本はなにについて語っているのだから、誰が書いたのか、なぜ書いたのだから、ということが気になってい

⁽⁶⁾
た」。

これらの問いは、子供の頃のベンヤミン、若いブルーストが出さなかった、当時まだ出せなかった問いである。これらは、今から話題にすることになるもうひとつの、もはや子供のではない読み方にたいする好奇心のきざしなのだ。この場合、サルトルがこのような問いを、成熟した読者の立場から、書物についての省察の萌芽として、あとから子供の世界に投影したということも考えられるが、それはたいてい重要ではない。本は何について語っているのか、誰が書いたのか、なぜ書いたのだから？ その答えが本の中にあることははっきりしている。だが、答えはどのようにしたら得られるのだろうか？

一生涯これらの問いを解くことに身を捧げる文学者の仕事全体が、その答えをあらわしている。理解されるべきテキストの質が向上し、畏敬の念を起こさせるものになるにつれて、この「何について」、「誰が」、「なぜ」がますます汲めども尽きぬ、挑発的なものになっていくことを、彼は、年をとるにつれてそれだけはっきり知ることになる。彼の仕事はすべて、逐字的な読書以上の、「夢に似たもの」とは異なる読書、つまり、子供らしい同一化からは導き出されることのない答えを明かしてくれる読書に照準を合わせているのである。

よくあるように、ここでもまた、無邪気さの喪失が、経験の門を通り抜けようとするときに、その代償として支払われる。われわれが子供のように読むことは二度とないが、そのかわり、努力や修練、作業に見合うだけの経験の領域、^{フロロロギッシュ}読む楽しみがわれわれを待ちうけている。「読書は^{フロロロギ}文献学的な欲求をみだし、文学的な刺激を与える。文献学なしでは、純然たる⁽⁷⁾哲学や文芸からはおそらく何も読み取れないだろう」とフリードリヒ・シュレーゲルは書いた。⁽²⁾

この文章が文学者の手になるものであるとすれば、思い上がりのそしりは免れまい。だが、これは——少なくとも一時期は——ドイツ文学が生んだ最も活動的な批評家の文章なのだ。この文章が何を意味しているのか、機知に富んだロマン主義的な逆説以上のものなのかどうか問うてみることは当を得ているように思われる。それは、何よりも^{フロロロギ}、文学学を用いずにとりわけ哲学的な、あるいは文学的な興味から読書することは不可能だという主張が逆説的な感じを与えるからである。純然たる文芸を、文芸のために読む者ほど読書に専念する者が他にいるだろうか？ 『緑のハイ
⁽³⁾ンリヒ』の場合でも、内面への門を開くために四十日

ものあいだ外界への門が彼に閉ざされていたとき、「開け、ゴマ」は、五十巻の小型厚紙表紙本のゲーテ著作集、著者自身による最終決定版に含まれていた。古物商がそれらの本をひもでくくり、運び去ったとき、「きらびやかな妖精の一群が歌いながら部屋を出て、そのために部屋が急に静かで空虚になってしまったかのように⁽⁸⁾」思われたのだ。

そして、二世代前に、若い、アントン・ライザーこと当時同年令のカール・フィリップ・モーリッツが⁽⁴⁾ハノーバーの市門の前でするのが常であったゲーテの著作の読書はさらに文学的であったように見える。「昼のあいだ、この草原をおごそかな静けさが支配していた。高い樫の木があちこちに分散して、陽光のただ中でわびしげに立ち、影を草原の緑に投げかけていた。——小さな茂みの中で耳を澄ますと、滝の音が間近に聞こえた——川の向こう岸には、気持ちのよい森がみられた。[...]」だから、この夏はアントン・ライザーにとってはまさに文学的な夏であった。——彼の読書は、美しい自然がその当時彼に与えた印象とともに、不思議な作用を彼の心に及ぼした。彼にはすべてがロマンチックで魅力的な光の中にあるように思われ、彼の足はそちらに向かったのである⁽⁹⁾。

シュレーゲルが「文学的」だと呼び、^{フィロロギー}文献学が欠如しているから何も読み取れないと非難したのは、そのような読書だったにちがいない。ここでの^{フィロロギー}文献学が何を意味するものなのかはまだ不明確なままである。だが、ライザーの読書が一夏を「文学的」にしたことをわれわれは確信できる。子供なら「テキストの力に身を委ねて」登場人物たちの中に紛れこめるので、この読書がそのような子供の読書とは異質のものであることははっきりしているようだ。この読書の誘因は好奇心や戯れではなく、（作者が述べているように）「心」にたいする「不思議な作用」なのである。テキストは、ある特殊な、心理学的には思春期の、アントン・ライザーの場合には歴史的にも確定可能な、「ロマンチックで魅力的な光」によりひき起こされる自己感情の形式の誘因、口実となっているのだ。

1785年頃には、ロマンチックという言葉はまだ文学史的な意味合いをもっていない。むしろこの言葉は、問い詰められるのではなく文学的に経験されることを望むテキストとの特殊な関係が生起していることを暗示している。滝のかたわらでライザーが読んでいるのはもちろん『若きヴェルテルの悩み』である。後に『詩と真実』の中で言及されるこの『ヴェルテル』の「ロマンチックで文学的な虚構」が青年ライザーに、

彼の経験の世界から無限に隔たった心の状態との感傷的な同一化を可能にするのだ。そのような虚構の感情の享受が問題にされているわけだが、これは結局のところ自己享受に他ならない。というのも、問題になるのは「心」にたいする「不思議な作用」だけであって、書かれたテキストが興味をそるわけではなく、そのテキストが可能にする、読者の未熟さの再確認が注目されるからだ。『ヴェルテル』には次の様なくだりがある。「ぼくはぼく自身の内部に引き下って、そこに一つの世界を見つけ出すのだ。むろん形のはっきりした力強い世界じゃない。予感とおぼろげな欲求のうごめいている世界だ。そうしてそこではいっさいが流れ動いている。ぼくは夢うつつに⁽¹⁰⁾そういう世界に心たくしく身を投げかけて行くのだ」。

それゆえこれは「純然たる文芸から」の読み取りであって、まだ未熟な読書の形式といえる。心情をかきたてるというテキストの可能性だけが利用されているにすぎない。このように読書の形式は、他の可能性を度外視しているのみならず、自分自身から目を転ずることができないでいるがゆえに未熟なのだ。

この読み取りはもちろん「純然たる哲学から」の読み取りとは相容れない。このあたりのことを、練達の⁽⁵⁾読者であるフーゴ・フォン・ホーフマンスタールは次の様なボレミックな文章でとらえている。「ドイツ人は、「実現されぬ形式」のいい換えにすぎぬ「深さ」を大変に自慢する。彼らに従えば、造化はわれわれを皮膚なしで、⁽¹¹⁾歩きまわる深淵と骸骨として作ったに違いあるまい」。彼らに従えば、とくに文学はそうした「深さ」の温床であり、脊椎も支柱もない存在、表面をもたぬ深淵、理念の貯えであって他の何物でもないということになるろう。「深さ」をそのように大層自慢するドイツ人の双生児というわけでもないが、純然たる哲学からものを読み取り、⁽⁶⁾『イフィゲーニエ』について、ベルトルト・ブレヒトには全く言語道断な、⁽¹²⁾「結構だが、一体何が実証されているのだろうか？」という問いを発した男がいる。彼もまた、論理的な明証によってではあるが、テキストにかんして、それが含んでいるいわゆる意義のみを知ろうとしているのだ。だが、彼ははわづつけられるであろう。両者とも、「哲学的な」問いのために、他の問い、つまり、「何を意味しているのか？」ではなくて「何について語っているのだろうか、誰が書いたのか、なぜ書いたのだろうか？」というような問いを忘れてしまっているのである。

^{フィロロギー}しかし、他の読者に伍して、^{フィロロギー}文献学的な読者はこれ

らのことを知ろうとする。今度は彼のことを話題にしてみよう。彼はどんな読者で、彼にとってテキストとはどのようなものなのだろうか？ テキストは純粋に哲学的に、また純粋に文学的に読まれることを望まないが、それでいて、哲学的にも、文学的にも読まれる。結局、この両方の読み方を、それも同時に可能にすることが文学者の仕事ということになるのではなからうか。この仕事は、両方の読み方を許容しそれぞれか挑発するテキストの存在を、そして、文学者を専門学科としてではなく読書の技術として理解することを前提としている。シュレーゲルは決して文学者について語っていたのではなく、「文学的な欲求」、それゆえ根源的で必然的な精神の欲求をみだすものとしての読書について語っていたのである。その精神の欲求は文学により呼び起こされる。読者をとりこにすると、欲求はつねに新たに活性化することになる。この場合にも、充足は一時的なものにすぎないのだから。

もちろん、欲求が活性化されるか否かは、読者がめざす対象次第である。文学的にも哲学的にも読もうということが真実であるとすれば、われわれは認識を求めて、しかも楽しむために読むことになる。美的経験は（反美学の流行などものともせず）楽しみを生じさせることができるのである。あの『イフィゲーニエ』に実証を求めた男（彼は数学者であった）に異議を唱えるのは、他ならぬプレヒトであった。「われわれが美の概念なしではやっていけないことがやがて明らかになるだろう⁽¹³⁾」この言葉で、——これまた練達の——ギリシア・ローマ文学、ドイツ文学に通暁した1930年代の読者は、古典主義時代の読書技術の概念に迫っている。

七十歳のゲーテが、「老作家におそらく似つかわしいにちがいない」所感という形で読書について書いたことは、今までのすべての考察の締めくくり、シュレーゲルの文章の注釈になるように思われる。「読者には三種類ある。判断をくだすことなく楽しむ読者と楽しむことなく判断をくだす読者、その真中に楽しむつつ判断をくだし、判断をくだしながら楽しむ読者がいる。実のところ、芸術作品を新たに再生させるのは、この真中の読者なのだ⁽¹⁴⁾」

この所感の結論はすでに、ゲーテがどんな読者を真の読者とみなしているかを示している。それは、楽しむだけの「文学的な」読者でもなければ、理屈をこねるだけの「哲学的な」読者でもない。むしろそれは、「文学的」であると同時に「哲学的」な読者であって、彼は一面的な読者の上位に置かれているが、その際、

楽しみが判断の上に来たり、判断が楽しみの上に来たりすることはない。この両者は互いに他を前提としているのである。楽しむことのできるのは、判断する術を知る者だけであろう。それは、読者の真の楽しみが理解に基づくものであるからだ。これによってわれわれは、——シュレーゲルが言ったような——「自らを文学的に刺激」しうる者の読書技術を実行に移すことになる。こうした転回にも、読書の両義性が含まれている。文学志向、感動の経験、思索への愛着がそれである。それらはすべてひとつのこと、すなわち、読者が芸術作品を再生することにねらいを定めているのだ。

かくして、ふつうの読者が幼年期のはじめての読書の陶醉の際にはまだ理解できないが、年を経て訓練を積むにつれ次第に理解するようになること、つまり、読書の技術には様々な程度があり、方法があるということがその道の権威者たちにより明確に示され、（これから明らかになるように）ある特定の芸術理解に関連付けられたことになる。——小説であれ、詩であれ、戯曲であれ——テキストのまとまり、テキストに内在する豊富な連関を現在化するのが最高の読書術なのだ。

ここでわれわれは、そうした連関を欠く本を問題にしていない。これはおごりではない。そのような本も学問の対象となりうるし、なるべきなのだから。だが、われわれは、今は、判断をくだしつつ楽しむ、楽しみながら判断をくだせる作品を問題にする。それは、ジャン・パウルが『ジベンケース』の序文で述べたようなそんな芸術作品である。「[...] 実のところ、二度読まれるに値しない本は、一度読む価値もない本なのだ⁽¹⁵⁾」。最初の読書は、まだ数のうちにはいらぬ。それは、まだ不案内な道のようなもので、思いもかけぬ方向にまがったり予期せぬ展望がひらけたりして、人々はその都度立ち止まっては、まだ雲のたれこめた遠方を眺める。またそれは、目的地にたいする好奇心や均斉のとれた足取りが旅人を、来し方をふり返ってみるだけの価値がある終着点に突然到達させるまでは、骨が折れ退屈でうんざりする、どちらかといえば回り道も同然の道である。

比喩的な言い方をよせば、最初の読書は主として素材をめぐるもので、単なる継続や知識の物質的獲得にとらわれている。この両者が喜びをもたらすことを否定する者は誰もなからう。しかし、（比喩的な言い方に戻ると）最初の読書はまだ、風景の知識、その均斉や状態、その要素の生き生きした連関についての知識

をもたらしはしない。最初の章はまだ道しるべのようなもので、その題字は確かに判読可能な名を示しているが、単なる名にすぎないのである。たとえば、フォンターネの『エフィ・ブリースト』⁽⁸⁾をはじめて読んだ者は、冒頭で二人のおてんば娘たちが「野ぶどうにかばおおわれた窓」⁽¹⁶⁾越しにふざけながら遊び友達に呼びかける「エフィ、おいで！」という呼び声を単なる名として読み取るだろう。

この呼び声は後にもう一度出てくる。その時も、はじめて読むわれわれには、——ヴィルヘルム二世時代初期の社会のきまりを軽べつしている——老ブリーストが墮落した娘に送る「エフィ、おいで」という電報の素材としての面だけが重要となろう。だが、この二語は、実家への帰宅以上のこと、すなわち死への回帰をあらわしているのだ。それは——挿入されている箇所では全く写実的で不可欠なものになっているとはいえ——作品全体の技巧や意味の連関をほのめかす、再読時に認識可能なあの諸要素のうちのひとつでもある。冒頭と末尾の同一の文面のあいだには、三百のページではなく、ひとつの生が横たわっている。偶然の呼び声が道しるべとなって、われわれは、因襲的な結婚生活にむなしさを感じたおてんば娘が、もうひとつの、悲しみにみちた「エフィ、おいで」に向かう道に何も知らずにはまりこまねばならなかったことを理解するのだ。作者は、生の連関を物語の連関という形で明らかにする（多くの関係のうちの）ひとつの関係を確立したのである。

ここには、日常体験⁽⁹⁾しうることや使い捨て文学（Verbrauchsliteratur）の単純さとわれわれが再三問題にしているものとの相違が認められる。日常、それに平凡な作家は、われわれに、単なる想像上の事実をもたらすにすぎない。ドイツ語圏ではあまり有名でないヴァージニア・ウルフは、『人はいかに本を読むべきか？』という講演の中で次の様に述べている。「彼らは芸術家ならもっているはずの支配し除去する力をもたなかった。まさに自分自身の生についての全真理を語るができなかった。彼らはスマートになったかも知れぬ物語を不格好にしてしまった。事実が彼らのわれわれに差し出すことのできるすべてであり、しかもそれはフィクションのきわめて劣悪な形式なのである」⁽¹⁸⁾。

しかし、すぐれた作品から文学的な刺激を受けた練達の読者は、再読の際に、書物の中に含まれているすべての真理にたいする感覚を研ぎ澄ませる。真理は、再読の際にフィクションの真理として具体化され、

「スマート」になり、現実よりも見通しやすく、より印象的なものとなる。作家の技巧としての「支配と除去」が、識別し、分離し、結合することでこれを可能にしたのである。そして、作家の足跡をたどることが読者に課せられた。その時、彼は、ノヴァーリス⁽¹¹⁾が言うように、「拡張された作者」になる。この表現は、「芸術作品を新たに」再生させよというゲーテの主張や、「何らかの創造に参加するつもりなら、読者は創造的にふるまわねばならない」というゲーテのシラー⁽²⁰⁾あての手紙の中の言葉、あるいは、シュレーゲルのいう、「文学的欲求をみたす」ための「読書」と全く同じことを意味しているのだ。作品の内部における連関、作品の構成や、そこでフィクションが日常の生を止揚する作品固有の生についてのこうした釈明よりはじめて、「本は何について語っているのだろう、誰が書いたのか、なぜ書いたのだろう」という問いが答えられるわけである。

もちろん、それらの問いがいつも答えうるとは限らない。そしてそのことが、真の読書が再読の際にはじめて始まることの理由にもなっている。再読には様々な理由があるが、本質を突き止め、現在化し、知覚を増強させるためという文学的⁽¹²⁾な理由はそのうちのひとつにすぎない。

二番目の、もしそういってよければ相変わらず主観的な理由は、再読するとわれわれの読みの習練が洗練されたものになるばかりか、感覚も研ぎ澄まされるからであり、つまりは、われわれが、苦勞して読むだけのかいがあること、読書はひとつの技術であることを再読により学べるからである。われわれが早くから読書するように促されたり、あるいは（差し支えないと思うが）誘惑されたりする機会が少なければそれだけこうした意識は弱まることになる。楽しみながら知覚する読者は、限りない、知覚しながら楽しむ享受を可能にするために、一度は知覚を鍛練したにちがいない。これには、エルンスト・ローベルト・クルティウス⁽¹²⁾が不満なドイツの文学状況を次の様に解説したときにその欠如を嘆いていた骨折りが必要である。「人々は困難なこと、大巨匠をものにして、その偉大な本質をかわいい我が身に注ぎこむことを避けている」⁽²¹⁾。

これで、再読を真の読書とみなす第三の理由が示されたわけだ。——このように書いても誇張ではないと思うが——読書において二つの歴史的な存在が出会う。そのひとつは特定の環境、特定の時代、特定の複雑な社会的・個人的制約の子である読者自身だ。同じ本を再読しながら、彼はそれをその都度別なしかたで

読むであろう。十六歳の頃は、『ヴィルヘルム・マイスター⁽¹³⁾』の詩人にかんする詩的言辞と魅力的なフィリーネの得がたい女らしさが自分にとって最も重要であったことを思い起こすとき、彼は自ら歴史的になる。

後になってようやく彼は、自分が細かな点にこだわっていたことに気づく。そのとき彼は、小説の中でそうした細かな点が全体の反映の反復として互いに照応していること、美的な舞台としての劇場が世界というより大きな舞台の仮の姿にすぎぬことを認めるだろう。そうなると、フィリーネは残念ながらわき役に回ることになる。すなわち、再読によって読者は自分自身の変化に気づき、ベンヤミンやモーリッツが報告する幼年期あるいは思春期の読書経験とは正反対のことを経験するのである。

しかし、本もまた、それが芸術作品であればなおのこと、独自の歴史的な統一体なのだ。ノヴァーリスはこのことを、——歴史意識の発展からみると——早い時期に明確に表現している。「本は歴史的な本質をもつ、きわめて重要な現代のジャンルである。本が伝統の代わりをするようになったのかも知れない。⁽²²⁾

文献学的な読者、ゲーテのいう中間のカテゴリーに属する読者にはとても重要な文学の特性がこの言葉であらわされている。文学の偉大な証言は、独自の歴史的な生を生きる。これが、ショーペンハウエルの「反復は学問研究の母だ」という箴言よりもなお意味深い、再読の第三の理由なのである。人生行路におけるわれわれとそうした証言の個人的な関係だけが変化するのではない。かつては生き生きと世界に立ちあらわれた証言の方も、各々の歴史的な時との新たなとりくみを挑発する。この新たなとりくみで、文化の連続体⁽¹⁴⁾が実現されるわけだ。人々が同じタルムード、同じバイブルの上に身をかがめていた、数千年の歳月のことを考えてみるがいい。

これは決して、とりくみかたがいつも同じであることを意味しているのではない。各々の世代は、彼らに伝えられた規範を改めて検証することで、自分自身をも検証しているのだ。彼らは、彼ら固有の瞬間の規定を容易にする関連点を手に入れる。再読してみて、容易に根拠付けられるものなら、それが古代ギリシア・ローマの人々にとって重要なものであっても、彼らは否認してもかまわない。また彼らは再読で、自分たちが見逃していた、「詩人はつねにわれわれの同時代人である」⁽²⁴⁾(ヴァージニア・ウルフ)ことを発見できる。ヴェルテルはヘルダーやヴォルフとは違った見方で、⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾ヴィラモヴィッツはラインハルトとは違った見方で⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾

ホメーロスを読んだ。彼らすべてにとって、ホメーロスは別様に重要だったが、それはつねに同じホメーロスであった。そのテキストの生地には、人間の境涯の不変性のみならず、流動的な時代に重要なものの変転もまた写しとられていたのである。

今一度シュレーゲルの言葉を借りると(現代は批評家の数が少ないので、われわれは、文学的あるいは哲学的にのみならず、^{フィロロギッシュ}文献学的にも読書していたかつての批評家の考えにくりかえし立ち戻らねばならない)、「[...] 絶え間ない、つねに新たに反復される古典作品の読書、何度も最初から始められる全作品群の通読、これのみが真の読書なのだ。こうした読書によってはじめて、豊かな実りが生じうる。芸術にたいする感覚や芸術を判断する力は、芸術全体、生成⁽²⁵⁾そのものの全体理解によってのみ生起しうるのである」。ここで読者は、ある不快感に襲われることであろう。この不快感に発言を許してみたい。「芸術全体、生成そのものの全体理解」が「生起」しえた時代は過ぎ去った。その上、そのような連関は決してドイツ文学の特徴ではなかった。ホーフマンスタールによると、ゲーテを除けばドイツ文学は添加物の寄せ集めにすぎず、さらに辛辣に言えば、「ゲーテによって混乱せぬ限り、われわれは彼によって自己を教育することができる。ドイツ文学によっては自己を教育することはできず、ただ混乱するばかりだ」。⁽²⁶⁾

ドイツ語圏では、規範めいたものは、他の所よりも存在しがたい。すでにエリザベス女王の時代以前にイギリス人に、おそくともそれと同時期以後フランス人に与えられた身分の平等を、ドイツ文学は知らない。文学的にみると、十八世紀の初めにはドイツはまだ発展途上国であり、他のヨーロッパ諸国から二百年はおくれた自国の古典主義を、他国の古典主義にはほとんどみられない歴史的・世界観的連関に具象化したのである。

換言すれば、「芸術全体、生成全体の」連関は、ドイツ文学にとっては、それが現代の世界にとっていずれにせよそうである以上に疑わしい存在なのだ。その支離滅裂ぶりが日毎にはっきりとした、さし迫ったものになるように思われる世界で、拘束性の欠如が過去の文学により埋め合わされるということの人々はもはや認めない。自己の現在にたいする深い不信は、現在がそこに由来する、過去にたいする不信という形で沈殿していく。その上、十九世紀の、芸術とのかかわり合いと教養の同一性にたいする確信が消滅し、これらのことはすべて読者を損なわずにはいなかった。「本

の持つ古代の静謐のなかに忍びこめるチャンスなど、微々たるものとなってしまった」という四十年以上も前のベンヤミンの言葉はおそらく正しかったに違いない。

それゆえ、本は確かに、ここで読書術として話題にされたようになしかたではあまり読まれていない。過去のいずれの世紀においてもそうであったように、活字になった過去はもはや未来を約束してはくれない。この実情を人々は甘受できるし、統計学的研究の対象にすることもできる。そうした研究はもしかすると、対象である本と読者のみならず、すべてのことを解明してくれるかもしれない。

だが、ごくわずかの⁽¹⁹⁾人々しか読書ができず、読書そのものが特殊な重要性をもち、魔法すら書物なしではありえなかった時代と同じように、この時代は読書を必要としているともいえる。われわれは魔法とは無縁である。しかし、われわれは、自分自身との永続的な対決、(その別の形式である)自分たちの歴史との対決、それなくしては意志の疎通が成り立たぬ言語の生産性との対決である読書をやめるべきではなからう。

それは、規範がどれほど疑わしいものであっても、その最大の機能が、一文化の共通語である「コイナー」⁽¹⁹⁾の保持と発達の促進に認められるからだ。この「コイナー」は、話し言葉や書き言葉ばかりでなく、豊富な共通例、形象化された経験、象徴的な経過、一度にすべてをあらゆる表現から成り立っているのである。

それゆえ、このことは、「それでもやはり読むこと」(ein Trotzdemlesen)にたいするひとつの弁明となり、たぶん、さらにいくつかの示唆を与えてくれるに違いない。読書術を楽しむを与えるものとしてではなく技能として叙述するときどうしても避けられぬ威嚇めいたものが、そうした示唆でいくらか取り除かれるであろう。

その示唆のひとつは、^{フィロローギツシュ}文献学的な読書が意識的に、絶えず自己弁明に努めることで、テキストとの純粋な出会い、テキストの完結性をだいなしにしてしまっているという、よく聞かれる抗議に対処してくれるだろう。

そうした抗議は、まだ逐語的に読むことだけが読書だと思っている者の見えすいた言いのがれにすぎない。⁽²⁰⁾クネーベルにあてた手紙の中で、ゲーテは、これにたいして、⁽²¹⁾ルクレーティウスに事寄せて、異論の余地なく断言している。「いわば詩人を切り刻むことをいとわないように。一般の賛美から特別な賛美に至る道はこれしかないのです」。⁽²⁷⁾細部に由来する「特別な賛

美」が、他の精神作用とは異なり、同時に部分から全体を新たに再現することに役立つという創造的な経験は、そのように読む者には拒まれることがない。

また、——おそらく彼自身のせいではないのだろうが準備不足のまま——見通しがきかないほど多くの読むに値する本に身をさらしている初心者、ある著作をを研究することになり、このことが他の著作の知識なしにはうまくいかないことを経験する初心者も、もう一度、熟練した読者のおかげで、少しは力づけられることであろう。というのは、われわれに合った本が次第に集められるばかりでなく、本をめぐる経験もまただんだん蓄積されていくからだ。そうした経験を、過去三世紀からひとつずつ、あわせて三つ最後に紹介してみたい。

まずはヤーコプ・ブルクハルトの⁽²²⁾言葉を引こう。「いちずに同時代の出来事だけにとりくむことほど⁽²⁸⁾認識の増進に無益で、学問生活を破壊するものはない」。この「いちずに」(ausschließliche)という単語に注目してほしい。この語の背景をなしているのは、各時代の特質がその歴史を考えに入れてはじめて理解できるものとなり、ある著作の特質が他の著作を考えに入れてはじめてはっきりしたものとなるという見方なのである。もしも、「詩人はつねにわれわれの同時代人である」という文が正しいとすれば、その身近さと見通しのよさのために人々が依拠しがちな、厳密な意味での同時代性は意味を失ってしまう。それと同時に、実行可能な読書の領域はいよいよ無限にひろがっていく。だから驚きを感じる学生も多く、たくさんの読書リストが、偉大な名が書かれた標識でその広大な領域を通行可能にしようとするが無駄である。こうした標識に従って進むと、他の偉大な名を見逃してしまうことになる。それでは一体どうすればよいのだろうか？

これは、ただ単に^{フィロロギー}文献学の授業でのみ取り扱われる問いではない。この問いは、正しく読もうとし、年をとるにつれてますます自分の知識の少なさを意識し、つねに新たに実り豊かであることを示すものに立ち戻ろうとする人をも悩ませる。

このようなジレンマに陥ったときにも、往々にして実際のなアングロ・サクソン人は頼りになる。そのうちのひとり、われわれと同時代人であり、おそらくは今世紀最大の読者のひとりであるエズラ・パウンド⁽²³⁾は、詩にかんして、一流の文学と交わる際に役立つ方策を用意している。「[...] たくさんの詩のあいだをそぞろ歩くよりも、わずかな最上の詩を実際に知り、調

べてみる方が、詩についてはより多くのことが学べる
と私は確信している」。

詩が、そもそも文学が代理的な性格をもっているという根本経験はこのような確信の背景をなしている。それは、本質的な行動のしかた、由々しい事情、自由な戯れが過去の瞬間において言及されることで現在の瞬間の代理となりうるためばかりではない。最良の作品が、代理的な、つまり範例的な、他の作品にも応用できる読書術の修練を可能にしてくれるという意味でもそうなのだ。「この言葉のモザイク、そこではそれぞれの言葉が響き、場、概念として左右に、そして全体にその力を放射している。記号の数量では最小でありながら、そのエネルギーは最大値を示しているのだ」⁽³⁰⁾。「…」。こう書いたニーチュと同じようにホラーティウスのある詩を理解した者は、ホラーティウス以上のものを理解したことになるのかも知れない。これだけのことで彼は抒情詩の「文献学的な」読書術への入口を発見し、その読書術をどの時代のどの作品にでも（現代の作品にでも）容易に応用することができるようになるだろう。ひとたび、『エフィ・ブリースト』の芸術特性、スタンダードあるいは「たかだか」トロロップの小説の構造を見抜いた者は、裂け目だらけの叙事文学の領域の尺度や道しるべにもはや悩まされることもないであろう。

読書の範例的、解明的な性格をこのように理解すれば、伝統の重みは軽減される。第三の経験がこうした理解を助けてくれる。約束通り、十八世紀最大の読者のひとりであるジョンソン博士⁽²⁶⁾の引用句によってこの経験を言い換えてみよう。「怠惰は抵抗されねばならぬ病気である（今日の大学でもこの言い回しは通用する）。だが、私は個々の学習計画の厳守をすすめるつもりはない。私自身（この学識ある著作家である！）どの計画も二日と続けて実行できたためしがないのである。人は、⁽³¹⁾ 好みを彼を導くままに読むべきなのだ」⁽³¹⁾。「…」。

結局のところ、読書術の手ほどぎをしてくれるのは他ならぬ読書そのものなのである。そのようなわけで、最後は再びパウンドの助言で締めくくってみようと思う。それはドイツ語になおしてあるが、その言葉は最後の断をくだし、同時にすべての文学的営みの共通性を表現しているようだ。「原典に早く近づけば近づくほど、私や誰か他の冗慢な批評家の言を傾聴する必要はますますなくなっていく」⁽³²⁾。

そのとき人は、どの声にも増してはっきりと語る、本のもつ古代の静謐に立ち戻ることができるのである。

原註

- (1) ヴァルター・ベンヤミン：全集，フランクフルト・アム・マイン 1974年以降逐次刊行，第4巻，103ページ。
〔晶文社，「ベンヤミン著作集」10，山本雅昭，幅健志訳『一方通交路』，47ページ。〕
- (2) ベンヤミン：前掲書，113ページ。
〔晶文社，前掲書，70—71ページ。〕
- (3) マルセル・ブルースト：失われた時を求めて，パリ 1954年（プレヤード文庫），第1巻，83—84ページ。
〔筑摩書房，「世界文学大系」57，井上究一郎訳『スワン家のほうへ』，55ページ。〕
- (4) 註2を参照のこと。
- (5) ブルースト：前掲書，85ページ。
〔筑摩書房，前掲書，56—57ページ。〕
- (6) ジャン＝ポール・サルトル：言葉，パリ 1964年，44ページ。
〔人文書院，「サルトル全集」29，白井浩司，永井旦訳『言葉』，39ページ。〕
- (7) フリードリヒ・シュレーゲル：校訂版著作集，ミュンヘン/パーダーボルン/ヴィーン 1967年，第2巻，第1部，239ページ。
- (8) ゴットフリート・ケラー：全集，シュトゥットガルト/ベルリン 1915年，第2巻，12ページ。
- (9) カール・フィリップ・モーリッツ：アントン・ライザー，K.D.ミューラー編，ミュンヘン 1971年，206—207ページ。
- (10) ゲーテ：全集，コッタ記念版，シュトゥットガルト/ベルリン 出版年不明，第16巻，10—11ページ。
〔新潮社，「新潮世界文学」3所収，高橋義孝訳『若きウェルテルの悩み』，12ページ。〕
- (11) フーゴ・フォン・ホーフマンスタール：全集，フランクフルト・アム・マイン 1959年，第15巻，55ページ。
〔弥生書房，都筑博訳『友の書』，117ページ。〕
- (12) ベルトルト・ブレヒト：8巻本全集，ゾーアカンフ書店編，エリーザベト・ハウプトマン協力，フランクフルト・アム・マイン 1967年，第8巻，385ページ。
- (13) ブレヒト：前掲書，8ページ。
- (14) ゲーテ：著作集，ヴァイマル版 1887年以降逐

次刊行，第4部，第31巻，178ページ。

- (15) ジャン・パウエル：全集，歴史的校訂版，ヴァイマル 1928年，第1部，第6巻，135ページ（『ジーベンケース』）。
- (16) テオドル・フォンターネ：全集，ミュンヘン 1959年，第7巻，180—181ページ。
〔中央公論社，「新集・世界の文学」12所収，辻理訳『罪のかなた』，306ページ。〕
- (17) フォンターネ：前掲書，411ページ。
〔中央公論社，前掲書，557ページ。〕
- (18) ヴァージニア・ウルフ：一般読者，第2集，ロンドン 1959年，264ページ。
- (19) ノヴァーリス：書簡と作品集，E・バスマート編，ベルリン 1943年，第3巻，85ページ。
- (20) ゲーテ：著作集，第4部，第11巻，265ページ。（1796年11月19日付けのシラー宛て書簡）
- (21) エルンスト・ローベルト・クルティウス：読書日記，ベルン/ミュンヘン 1960年，114ページ。
- (22) ノヴァーリス：前掲書，609ページ。
- (23) ショーペンハウエル：全集，ヴォルフガング・フライヘル・フォン・レーナイゼン編，ダルムシュタット 1968年，第5巻，657ページ。
- (24) ヴァージニア・ウルフ：前掲書，265ページ。
- (25) フリードリヒ・シュレーゲル：著作にうかがえるレッシングの精神，ライプチヒ 1810年，第1部 23ページ。
- (26) ホーフマンスタール：前掲書，74ページ。
〔弥生書房，前掲書，158ページ。〕
- (27) ゲーテ：著作集，第4部，第34巻，138ページ。（1821年2月21日付けのクネーベル宛ての書簡）
- (28) ヤーコブ・ブルクハルト：書簡集，M・ブルクハルト編，バーゼル/シュトゥットガルト 1963年，第5巻，131ページ。
- (29) エズラ・パウンド：読書のABC，ロンドン 1951年，43ページ。
- (30) ニーチェ：3巻本著作集，カール・シュレヒタ編，ミュンヘン 出版年不明，第2巻，1027ページ。
- (31) ボズウェルのジョンソン伝，G・パークベック・ヒル編，オックスフォード 1934年，第1巻，428ページ。
- (32) パウンド：前掲書，46ページ。
なお〔 〕内は訳者の註記を示す。

訳註

- 〔1〕 ベンヤミンは1940年9月亡命の途上，スペインで自殺した。
- 〔2〕 Friedrich von Schlegel (1772-1829) ドイツ初期ロマン派の批評家。兄のヴィルヘルムとともにロマン主義の根本理論を確立し，ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』をロマン主義文学の極致とみなした。
- 〔3〕 スイスの作家ゴットフリート・ケラー (1819—1890) の半自伝的教養小説。
- 〔4〕 Karl Philipp Moritz (1757-93) ドイツ初期ロマン派の先駆をなす小説家，神話および芸術学者。ゲーテの友人でベルリン美術学校古代学教授をつとめる。『アントン・ライザー』(1785—90)をはじめ，いくつかの自伝風小説を書いた。
- 〔5〕 Hugo von Hofmannsthal (1874-1929) オーストリアの作家。一生のほとんどをウィーンで過ごし，繊細な感覚で文学のあらゆる分野にその才能を発揮した。
- 〔6〕 正しくは『タウリスのイフィゲーニエ』(1787)。ゲーテの古典主義時代の代表作で，エウリピデスの同名の作に題材を求めた戯曲。
- 〔7〕 Jean Paul (本名：Johann Paul Friedrich Richter) (1763-1825) ドイツの小説家，古典主義とロマン派のあいだに立つ特異な作家で，その作品には博識に裏付けられた美とユーモアがあふれている。『ジーベンケース』(1796—97)は牧歌的小説で，とくにその陰影に富んだ細密描写はケラーやラーベなどに大きな影響を与えた。
- 〔8〕 Theodor Fontane (1819-98) ドイツの小説家。リアリズムの完成者であるとともに，自然主義にも深い理解を示し，両者の媒介者として重要な存在である。『エフィ・ブリースト』(1895)は愛なき因襲の結婚の崩壊過程を描いた小説。
- 〔9〕 前後の文脈から判断すると，内的連関を欠いた，ジャン・パウルの述べているような再読に値しない文学作品のことを意味するものであろう。
- 〔10〕 Virginia Woolf (1882-1941) イギリスの女流小説家。『ダロウェイ夫人』(1925)や『灯台へ』(1927)などで，意識の流れを追求する内面的描写を展開した。
- 〔11〕 Novalis (1772-1801) ドイツ初期ロマン派最大の詩人。散文抒情詩『夜の讃歌』(1800)，未完

- の小説『青い花』（1802）のほか、『花粉』（1798）などの断片集があり、そこでは彼のいわゆる「魔術的観念論」と自然哲学が展開されている。
- [12] Ernst Robert Curtius (1886-1956) ロマニストとして中世ラテン文学を研究する一方で、ヨーロッパの伝統を深く追求し、その幅広い視野から数々の評論を産み出した。主要著作に『ヨーロッパ文学とラテン中世』（1948）、『ヨーロッパ文学評論集』（1950）がある。
- [13] ゲーテの小説『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』（1795-96）のこと。人間の精神形成をテーマとした教養小説の典型。フィリーネはその登場人物のひとりで、愛嬌があり悪戯好きな女性。
- [14] ユダヤ人律法学者の口伝・解説の集成で、バイブルに次ぐユダヤ精神文化の源泉である。
- [15] Johann Gottfried Herder (1744-1803) ドイツの思想家。せまくるしい規範を越え、人間の魂そのものからわき出る詩（自然詩）に帰ることを主張した。彼によれば、ホメロスやオシアンはこの自然詩にはいる。主著として『人類の歴史の哲学』（1784-91）がある。
- [16] Friedrich August Wolf (1759-1824) ドイツの古代学者。ホメロスの作品とその成立を考究した『ホメロス序説』（1795）の著者。ギリシア文化に調和のとれた人間性形成の理想像を見出した。
- [17] Ulrich von Wilamowitz-Moellendorf (1848-1931) ドイツの古代学者。古代ギリシア文学の翻訳者としても知られている。『ギリシア詩学』（1919）で自己の韻文研究を集大成した。
- [18] Karl Reinhardt (1886-1958) ドイツの古代学者。『ソフォクレス』（1933）、『イーリアスとその作者』（1961）などの著書のほか、翻訳も多い。
- [19] アッティカ方言を基礎とする標準ギリシア語で、ヘレニズム、ローマ時代（紀元前3世紀～5世紀）に通用した。
- [20] Karl Ludwig von Knebel (1744-1834) プロイセンの士官でカール・アウグスト公の弟の傳育官。ゲーテのヴァイマル入りのきっかけをつくった人物でルクレーティウスを研究し、その作品を翻訳していた。
- [21] Titus Lucretius Carus (zw. 99 u. 94-55? v. Chr.) ローマの詩人、哲学者。エピクロス思想を詩の形式で祖述した『物の本質について』が代表作。
- [22] Jacob Burckhardt (1818-97) スイスの文化史家で、『イタリアにおけるルネサンスの文化』（1860）の著者として有名。
- [23] Ezra Pound (1885-1972) アメリカの詩人。イマジズムの指導者として現代詩に新風をおこし、T.S.エリオットらに大きな影響を与えた。
- [24] Quintus Horatius Flaccus (65-8 v. Chr.) ローマの詩人。ヴェルギリウスの親友でアウグストゥス皇帝の親任をえていた。代表作に『抒情詩』（前23, 13）や『書簡詩』（前20）がある。
- [25] Anthony Trollope (1815-82) イギリスの小説家。1日3時間で3,000字という機械的なやりかたで小説を書き続け、50編もの小説を残している。
- [26] Samuel Johnson (1709-84) イギリスの著作家、辞書編集者。その人望と豊かな学殖のために「博士」と称された。

訳者付記

ヴァルター・キリー (Walther Killy) は1917年8月26日にボンで生まれた独文学者で、ゲッチンゲン大学、ベルン大学の教授を歴任し、現在、ヴォルフエンビュッテルのアウグスト大公文庫 (Die Herzog August Bibliothek) で後進の指導にあたっている。彼の主たる研究対象は抒情詩であり、とくにトラークル研究の権威として知られている。主要著作としては、ゲーテ、ヘルダーリン、ブレンターノ、メーリケ、ペン、ブレヒトの詩を論じた『抒情的形象の変遷』(“Wandlungen des lyrischen Bildes”, 1956)、トラークル研究の集大成『ゲオルク・トラークル』(“Über Georg Trakl”, 1960)、大衆・娯楽文学の諸相を現象学的に分析した『ドイツのキッチュ』(“Deutscher Kitsch”, 1961)、19世紀の欧米の小説を幅広い視野でとらえた『現実と芸術特性』(“Wirklichkeit und Kunstcharakter”, 1963)、きわめて新鮮な抒情詩概論『抒情詩入門』(“Elemente der Lyrik”, 1972)があげられる。また彼は編集者としても多彩な活動をくりひろげ、トラークルの歴史的校訂版全集 (Georg Trakl: Dichtungen und Briefe. Historisch-Kritische Ausgabe, 1969)、『ドイツ文学。テキストと証言』(Die Deutsche Literatur. Texte und Zeugnisse, 1963ff.)、『フィッシャー文学事

典』(Das Fischer Lexikon. Literatur, 1964/65) などの編集を手がけている。

ここに訳出した『読書について』(“Über das Lesen”) は、彼の最近のエッセイや論文を集めた『書きかた、読みかた』(“Schreibweisen und Leseweisen”, 1982) の巻頭をかざるエッセイである。キリーはここで、創

造的な読書のさまざまな条件を、古今の作家や思想家の証言を手がかりに検証しようとしている。その行間からは、本来「言葉への愛」(Liebe zum Wort) を意味する文献学フィロロギエの生き生きとしたイメージが浮かび上がってくるようだ。